



学内研究奨励実施報告

二〇一八年度をもって、平成二十八年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）の交付を受けた光吉文庫の整備作業が終了いたしました。

二〇一九年度は学内の研究奨励を受け、より利便性の高い目録データを構築するための見直し作業を行いました。今後も作業を継続する予定です。

本研究センター助手の宇佐美より、昨年度の実績をここに報告いたしますとともに、院生アルバイトの一人として作業にご協力いただいている阿部泉氏にご寄稿いただきました。

白百合女子大学研究奨励実績報告

研究代表者 浅岡靖史教授
報告者 宇佐美奈麻子

二〇一九年度は、学内研究奨励費の交付を受け、光吉文庫の目録データの見直し作業を行った。センター所長・浅岡靖史教授による研究課題名は「光吉夏弥旧蔵書籍を十全に活用するためのデータ構築」である。

〔研究概要〕

本研究は、本学図書館の学術リソースと国立国会図書館（NDL）サーチで公開している、光吉夏弥の旧蔵書一万三三二〇冊の目録データを見直し、オ

ンライン検索に適した書誌情報にブラッシュアップすることで、光吉文庫の貴重なコレクションを十全にいかし、児童文学・児童文化研究の発展に寄与することを目的とする。

既存の目録データは、約十八年前に冊子用として作成されたため、オンライン検索を想定した書誌情報とはいえず、センター蔵書を目当てに足を運ぶ研究者や、NDLサーチで資料を検索する利用者に対し、的確な情報を提供できないおそれがあった。

〔作業の報告と成果〕

本学図書館のシステム担当者とも相談し、書誌項目の追加・修正を行った。なかでも追加項目に関しては、センター独自の基準でオンライン検索にふさわしい書誌項目を立て、資料情報を新たに入力する方針をとった。その全項目は次のとおりである（太字が追加・修正項目）。①タイトル、②タイトル言語、③タイトルよみ、④原タイトル、⑤サブタイトル、⑥サブタイトル言語、⑦サブタイトルよみ、⑧シリーズ、⑨著者（一〇一七名）、⑩著者標目（一〇一七名）、⑪著者別名、⑫著者よみ（一〇二二名）、⑬画家（一〇二〇名）、⑭著者標目画家（一〇二〇名）、⑮画家別名、⑯画家よみ（一〇四二名）、⑰翻訳者（一〇一三名）、⑱著者標目翻訳者（一〇一三名）、⑲翻訳者別名、⑳翻訳者よみ（一〇一三名）、㉑編集者（一〇八名）、㉒出版社（一〇二名）、㉓出版年、㉔初版年、㉕備考a～k、㉖本文言語（一〇四）、㉗貴重書である。ちなみにカッコ内の人名の人数は、資料によってさらに増える可能性がある。また、備考a～kの細目においても追加・修正を行った。現時点での入力事項は、「c…

前書き・後書き・解説者」、「e…装丁者」、「f…全集・短編集など収録作品三つ」、「g…その他」（改訳版・直筆メモ・付録など）、「h…監修者・改訂者・改訂者・校訂者・校閲者・訳注者など」、「i…再話者などの原文情報」（業譜含む）、「j…タイトル・サブタイトル・シリーズにあてはまらない重要な情報」、「k…翻訳全集の著者」（八〇名以上の場合に適用した）である。これらの項目に従い、一冊ずつ資料と旧データをつき合わせ、誤字・脱字も訂正しながら目録データを再構築した。

当初の研究計画では、光吉が関心を寄せたキーワードを新たな項目として加える予定であったが、平成二八〇三〇年度科学研究費助成事業の成果である「情報カードデータ」が、すでにキーワード分類され、蔵書とリンク付けされているため、キーワード検索はカードを基準に行うほうが効率的であると判断した。あくまで今回は、学術リソースとNDLサーチで公開する目録データであることを念頭におき、オンライン検索に不可欠な著者標目・著者の統一（一名）の入力を最優先することとした。著者標目が増えることにより、筆名や別名をもつ同一著者の著作がまとめて検索可能となる。たとえば、著者名が和書（翻訳書）では「ドクター・ストース」「スー」「シュース」、洋書では「Dr. Seuss」「Seuss」「TheSieg. Theo.」というように、資料によって表記が異なる場合、著者が同一人物であることを示すために著者標目（統一一名）を決めなくてはならない。この例では、本名の「Geisel, Theodor Seuss」を標目として採用した。そうすれば、絞り込み条件（ファセット）に「Geisel, Theodor Seuss」だけが

表示され、同一著者の著作がまとめて検索しやすくなる。また全体としても、作品名より著者名で横断検索することを重視し、前書き・後書き・解説者・装丁者・監修者・改訂者・改訂者・再話者などの人名に関しては、前述のとおり「備考a~k」の細目に振り分けて入力した。このなかには図書館の目録では採用されない情報も含まれているが、光吉文庫の蔵書（児童書・洋書絵本・貴重書など）の特質上、資料情報として重要と判断したものはほぼ網羅して入力した。

こうしたセンター独自の書誌項目を追加するにあたり、書誌の形式を統一する入力規則も、図書館の目録入力規則とは別に作成する方針をとった。目録作成は、図書館業務のひとつであるが、センターが所蔵する三文庫（富田・金平・光吉）の特徴をいかし、研究資料として十全に活用するためには、児童文学・児童文化の観点から書誌項目も入力規則も新たに構築しなければならぬことが今回の作業で判明した。

作業は院生アルバイト四名を雇用し、二〇一九年十月（二〇二〇年二月（冬期休暇除く））の約五か月間行った。総作業時間は三九七時間である。目録データの見直しは、一万三三三二〇冊のうち三九二二冊が終了した。一か月の平均終了冊数は七八四冊である。

本研究により、貴重なコレクションを十全に活用するためのデータベースが再構築されつつある。今後、全冊の資料と旧データのつき合わせが完了し、ブラッシュアップした目録データを公開できれば、研究資料として高い価値を有する光吉文庫は、本学の特色ある蔵書のひとつとして広く活用され、児童文学・児童文化研究はもとより、文化史や出版史研究の深化にも寄与することが期待できる。

〔センター助手〕

光吉文庫の目録修正作業をして

阿部泉

私は、学内研究奨励による、光吉夏弥先生の所蔵資料の整備作業に当たらせていただきました。それは、パソコンにある旧目録データと照合して、所蔵されている資料の書誌の追加・修正を行うというものです。

作業を進めていく中で、光吉先生の書籍は必ずしも児童文学ジャンルのものでなく、桜の写真の本や旅行に関する本、英語についての本なども見受けられました。また、同じタイトルの本で訳者が同じでも、以前のものとそこから改訂されたものもありました。改訂されたものには、訳者による言葉が新たに加えられたりもしていました。

多くの方に活用していただけるように、これからもデータベースの再構築の作業を進めていきたいと思えます。

〔博士課程（前期）〕

ちりめん本展示

昨年十一月、白百合女子大学にて開催された日本児童文学学会第五八回研究大会に合わせ、本学図書館とちりめん本研究プロジェクトの共催で、「ちりめん本にみる東西文化の融合——明治の木版多色刷り絵本の世界」展が開催されました。

この展示につきまして、展示を企画した、ちりめん本

研究プロジェクトのメンバーの一人である松村裕子先生に、ご寄稿いただきました。

主催 白百合女子大学図書館

児童文化研究センターちりめん本
研究プロジェクト

会期 二〇一九年十一月二十日（水）〜

十二月十二日（木）

※十二月二日（月）に展示替え

会場 白百合女子大学図書館 二階吹き

抜けスペース

ちりめん本展示を振り返って

松村裕子

ちりめん本研究プロジェクトは、間宮史子教授のもとで二〇一九年に始まったばかりの新プロジェクトです。一年目の目標は、十一月に白百合女子大学で行われる「日本児童文学学会第五八回研究大会」にあわせ、図書館と共催でちりめん本の展示を行うことでした。白百合女子大学には、故桑原三郎教授の集められた資料を含む、ちりめん本コレクションがあります。尾崎るみ統括のもとで、メンバーが手分けをして解説執筆を進めました。短期間での準備のため慌ただしい日々でしたが、発見の連続でもありました。遠藤知恵子は、構図から挿絵を読み解くことを試みました。挿絵の小林永濯は狩野派に学びながら西洋画の表現を取り入れるなど、時代の転換期を代表する絵師です。二〇一九年は明治期の浮世絵を集めた展覧会が都内で開かれており、時宜を得た展示

であることを示すことができませんでした。浜名那奈はちりめん本執筆者について丁寧な解説を書き、伊藤敬佑は「クイズ」を含むユニークなポスターを作成し、おかげで多くの来場者を得ることができました。

柏村は昔話の視点から解説を行うことになりましたが、正直に言えば苦戦の連続でした。ちりめん本は従来英語版中心に研究が行われていましたが、スウェーデン語版三冊のうち二冊は英語版と内容が異なることが明らかになりました。つぎに、もともなかった昔話の調査を行いました。口承文芸は本来文字に残るものではないという制約に加え、先行研究が多領域に散見され全体像をつかむのに時間がかかりました。それでも、すでに関連が指摘されていた『舌切雀』に加え、『猿蟹合戦』『勝々山』『花咲翁』の三作品も滝沢馬琴『燕石雜志』の記述に基づいていることがわかりました。

展示は終わりましたが、まだ課題が残されています。スウェーデン語版は何に拠って執筆されたのでしょうか。また調査中に、ちりめん本に拠ったと考えられるオランダ語の日本昔話集を目にしました。ちりめん紙から離れた日本昔話の流通についても考えたいところです。二年目はメンバーそれぞれが自身の研究課題について取り組みます。今後明らかにされることは多々あるでしょう。なお一年目の研究成果として、尾崎るみが「弘文社のちりめん本『歐文日本昔噺』シリーズ誕生の背景——長谷川武次郎・デイビッド・タムソン・小林永濯の協働」（『児童文化研究センター研究論文集』第23号）を発表し、宣教師の活動とちりめん本、武次郎の兄の仕事に光を当てました。柏村は「*Japnesiska studier och skizzer*」における「日本昔話の紹介について」（『児童学研究・聖徳大学児童学研究紀要』第22号）という拙文をまとめました。最後に、個人的な感想をひとつ。今回の

プロジェクトは英米児童文学研究者やフランス児童文学研究者、童画研究者が集って行われ、児童文化は分野を超えて研究されるべき領域であると実感できたこと。そして専門分野の異なる先輩後輩が児童文化研究センターに集い、恩師から学んだことを発展させようと奮闘していることそのものも、やはり幸福な成果として記しておきたいと思います。

〔本学非常勤講師・研究員〕

センター構成員活動紹介

できることをひらき出す

高原佳江

白百合女子大学では、修士・博士課程学生と、児童文化研究センター助手として十年間を過ごしました。この間、絵本研究をご指導いただき、また、貴重な経験をさせていただきました。

昨年四月からは、兵庫県にある甲南女子大学で教員として働いています。今回は、大学での仕事について、とくに担当している授業とそれに関連して考えていることについて書きたいと思います。

所属しているのは、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生が学ぶ、総合子ども学科です。ここで、「保育内容の研究（言葉）」、「保育の表現技術」、「幼児理解」、「保育実習指導」、「総合子ども学基礎演習」等の科目を担当しています。これらの授業で私が大切にしている

のは、学科が所有している約四、三〇〇冊の絵本を活用することです。

例えば、「総合子ども学基礎演習」では、学生と一緒に「絵本紹介」を作成しています。この「絵本紹介」は、自分が紹介したい絵本について、絵本の題名、作者、出版社、出版年、サイズ、あらすじ、おすすめ理由、絵本の中で印象に残った場面の絵を一枚の紙に表わすものです。まず、学科にある絵本をできるだけ多く、そして細かいところまで丁寧に読みます。それから、紹介したい絵本を決め、「絵本紹介」を作成します。完成した「絵本紹介」は、学内の子育てひろばの利用者に配布されるおたよりに、毎月ふたつずつ掲載されています。この試みを通して、昨年度の学生は、たくさん絵本と出会うと同時に、一冊の絵本とじっくり向き合うことができ、楽しかったようです。また、作成した「絵本紹介」を子育てひろばを利用する子どもや保護者の方に見ていただくことができ、嬉しかったようです。

今年度前期授業は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、すべてオンライン授業となりました。限られた素材で工夫しながらではありますが、今期も「絵本紹介」を試みるところです。学生にとって、レポート課題が多い中で、「絵本紹介」のように手がきの文字と絵で表現する課題は面白いのではないかと考えたためです。そして、「絵本紹介」を含むおたよりの発信が、普段子育てひろばを利用している子育て家庭の安心感につながることを願っています。

学生は、保育者や教員になったら、子どもと一緒に絵本を読むことがあるに違いありません。そのようなときにもっとも大切なことのひとつは、読む人自身が絵本を楽しむことではないでしょうか。在学中に学生が絵本の楽しさを知る機会を多くつくりたいと考えています。

総合子ども学科は、「絵本に強い養成校」として広く学内外にアピールしているようとしています。そのような環境で絵本を活用してさまざまな試みをさせていただけるとを幸せに感じつつ、白百合女子大学で絵本や児童文学について学んだことを生かしてこれからも自分自身でできることをひとつずつ丁寧に行っていきたいと思っています。

〔研究員〕

大学院生活動紹介

二〇二〇年度は、児童文学専攻博士課程（前期）／修士課程三十周年、博士課程（後期）／博士課程二十五周年という、節目の年に当たります。

『センター報』では例年、おもに修士生による活動紹介記事を掲載しておりますが、本号では、この節目の年に際し、在学中の大学院生であるグラントウ カトゥリーナ氏と、五井結基氏のお二人にご寄稿いただきました。若き研究者たちの「いま」をお伝えできれば幸いです。

働く大学院生

グラントウ カトゥリーナ

日米ハーフのグラントウです。私は学部卒業後、一度は図書館に就職しました。しかし、元々大学院進学を希望していたので、社会人五年目に一念発起して大学院を受験し、無事に合格。修士課程入学を機に一旦退職しま

したが、博士課程（後期）に進学した際、図書館勤務も再開し、今ではキャンパスにいるよりも職場にいることの方が多い「働く大学院生」となりました。

博士課程（後期）に進学して今年で四年目。研究の中心はYA向けのネオ・ファンタジーと、図書館におけるYAサービスです。

前者については、特に「異世界、境界、混血、異形の人など、あちら側の世界や存在がどのように描かれているのか」をテーマに取り組んでおり、昔話の異界訪問譚や異類婚姻譚などにも関心を持っています。また、昨年度までの三年間、プロジェクト「ネオ・ファンタジー研究会」の統括を務めていました。様々なメンバーの参加もあり、今まで読んだり観たりしたことのない作品とも出会い、有意義な時間を過ごせました。

後者に関わる部分として、現在は週四日、公共図書館の小さな分室で働いています。選書や展示の準備など日々の業務に追われ、以前の職場（公共図書館のYA担当や高校図書館）ほどYA関連の業務に関わっていないのが悩みですが、研究と現場での経験をいかに結び付け、活かし合っていくのか、模索しています。

大学院生と図書館司書。二つの身分があつて良いこともある反面、うまく両立できないなど悩みも尽きません。けれど、きつと「これが正解」という明確な答えはないのかもしれない。ただひたすらに自分が選んだ道を頑張っていく、ときには切り拓いて、たまには（しょっちゅう？）休み、悩んで……その先に見えてくるもの、手に入れられるものを見極めていきたいと思っています。決して楽な道ではありませんが、せつかくの機会を無駄にはしたくない。そんな思いで頑張っています。

〔博士課程（後期）〕

師匠たちの教え

五井結基

私が研究対象としているのは、二十世紀初頭アメリカのジャック・ロンドン（一八七六一一九一六）という人物で、アメリカ文学の正典的な作家のひとりです。彼は、一九世紀後半から第一次世界大戦前までの「アメリカ児童文学黄金期」に児童文学作品を執筆しています。ロンドン研究をする院生ライフを送っていく中で、研究分野や時代などが違う、とても多くの方々が、論文の形式、研究内容、方法論に関して助言を下さります。面白いことに、様々な立場の方々からご意見を頂くと、その中にはある方とは逆のことを仰る方も現れてきます。中でも、このふたつの意見は対立していると感じるのは、方法論と立場の問題です。私はとある先生の影響を受け、ロンドンが生きた時代の言葉の使われ方や、それが当時の読者に何を想起させたのかを調べることで、その小説が当時どのようなイメージの中で読まれていたのかを考える、ニューヒストリシズム的なアプローチをとることが多いのですが、これに関して左派批評の別の先生は、このやり方だと表象や同時代の言説の在り方は見えるが、思い切ったイデオロギー批判するのは難しいのでは？と仰ります。確かに、私の力不足といえはそれまでですが、政治性の弱さは痛感しますし、全国誌への投稿では、ある程度政治性が必要なのだと、よくご指導を頂きます。しかし、前者の先生は、イデオロギーを持ち出すと結局同じ結論になると批判されます。イデオロギーや思想研究で説明しきれないものを、言説や表象から発掘していく面白さをその方は教示して下さい

ます。

ロンドンには、マルクス主義者ですが、現代からみれば、テキストの意味が曖昧な箇所が多数あるのも事実です。板挟みですが、児童文学という「歴史・テキスト」と共に、ロンドンを通して、対立する師匠らの教えを「止揚」していくことがロンドン研究をする上での課題のひとつです。

〔博士課程（後期）〕

プロジェクト活動報告

児童文化研究センターは、センター構成員による研究の促進を目指し、プロジェクト制度を設けています。

二〇二〇年度は、次の四つのプロジェクトが活動しています。

新型コロナウイルス感染症流行の影響により、活動に制約はございますが、いずれのプロジェクトも安全面に留意しつつ、研究を進めております。

小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表 猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵資料）の翻刻・研究を継続しています。二〇一九年度は、明治三十九年の日記を読み進め、また三十八年五月〜八月の翻刻と注釈を「児童文化研究センター研究論文集」に発表しました。国語

国文学専攻の大学院生にも注釈等の手伝いをしてもらったので、その成果も別途発表できればと考えています。

二〇二〇年度は、明治三十九年〜四十年の日記を読み進める予定です。新型コロナウイルス流行の影響が甚大ですが、何らかの方法で研究会を続けて参りたいと思います。

近現代児童詩歌研究

（研究代表 宮澤賢治）

昨年度は、諸事情により『児童詩歌』の発行を見送りました。今年度は十六号作成に向けて、編集作業や印刷の手立てを整えながら、各自できることを準備して参りたいと思います。研究会の開催については、時期や手段を検討し、適宜対応していくつもりです。

今年度も、近現代児童詩歌への、細く長い研究活動を続けていきたいと思えます。

紙芝居研究

（研究代表 浅岡靖史）

昨年度は、本プロジェクトの第二期としてスタートしました。月例研究会では、『紙芝居研究』第二号の合評、台湾における紙芝居研究の紹介、本学図書館に新しく入庫した紙芝居作品の紹介と実演、「紙芝居サミット」の報告に加え、すみだ郷土文化資料館で行われた「教育紙芝居の出版」展も見学しました。さらに、本学で開催された、第五

十八回日本児童文学学会研究大会では、ラウンドテーブル「誰が「教育紙芝居」を作ったか？」にも参加しました。そして年度末には、各メンバーの研究成果をまとめた、『紙芝居研究』第三号を無事に発行することができました。今年度は、研究会開催の目的は未だ立ちませんが、それでもメンバー一人ひとりが地道に研究を続行し、『紙芝居研究』第四号に結実させたいと考えています。

ちりめん本研究

（研究代表 間宮史子）

二〇一九年度から活動を開始した本プロジェクトですが、初年度にもかかわらず、白百合女子大学で開催された日本児童文学学会第五八回研究大会にあわせ、一月二〇日から二月二日まで図書館二階吹き抜けスペースで展示「ちりめん本にみる東西文化の融合——明治の木版多色刷り絵本の世界」を行いました。この準備過程で各メンバーが見出した関心をもとに、二〇二〇年度は個別の研究を推進させる予定です。それぞれが異なる角度からちりめん本にアプローチすることによって、新たな側面が浮かび上がることを期待しています。

※「あまん・立原・安房作品研究プロジェクト」及び「SF・ファンタジー小説の研究と創作プロジェクト」につきましては、今年度は活動をいったん休止し、次年度からの活動再開に向けてメンバー各自、研鑽を積んでおります。



センターからのお知らせ

構成員研究発表会

児童文化研究センターでは、主催研究会のひとつとして、二〇二一年度から、「構成員研究発表会」を開催しています。この発表会では、児童文学専攻の博士課程（後期）に在籍する三年生が中心となって、研究発表をします。

詳細は児童文化研究センターホームページなどでお知らせいたしますので、興味のある構成員の方はご参加ください。

沼辺信一氏講演会延期について

二〇二〇年三月に開催を予定していた沼辺信一氏講演会は、新型コロナウイルス感染症流行による緊急事態宣言発令を受け、延期といたしました。

開催の目処がつきましたら改めて広報いたしますとともに、お申し込みいただいた方々にご連絡差し上げます。ご理解くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

センターブログ

センターブログは、二〇二一年に児童文化研究センター公式サイト内に開設され、当センターからの情報発信及びセンター構成員による自由な投稿の場として活用されてお

ります。

二〇一九年度は創作を中心に、展示会のレビューやプロジェクトに関連するエッセイなどもご投稿いただきました。二〇二〇年度以降も引き続き、構成員の皆様のご投稿をお待ちしております。

センターブログ 投稿募集について

【募集内容】

児童文学・文化に関わる

- ・ 批評 ・ 研究ノート
- ・ エッセイ ・ 創作 ・ 翻訳
- ・ 新刊書／映画／展覧会／講演会の紹介
- や感想

* 一五〇〇字程度まで（それより長くなりましたら、数回に分けて掲載、または連載となります。ご相談ください）。

投稿原稿は、当センター宛てのメールに添付して送ってください。

原稿の内容により、掲載をお断りすることがあります。詳しくはセンターブログをご覧ください。当センターに直接お問い合わせください。

センターブログには皆様のご投稿に加え、センター非公式キャラクター「猫村たみ」による三文庫案内ほか、不定期の連載記事も掲載しております。

ご興味のある方は、まずはブログをご覧ください。

ブログ：<http://jido-bun.blogspot.com/>

書評コンクール

二〇一九年度は、センターブログにて書評コンクールを開催いたしました。

夏休み中に開催した第一回コンクールでは八本の応募があり、構成員の投票により、博士課程（後期）在籍の深民麻衣佳氏の作品（吉川トリコ『マリー・アントワネットの日記 Rose/Bleu』の書評）が優秀作品に選ばれました。

春の第二回コンクールでは六本の応募があり、ペンネーム・しあわせもりあわせ氏の作品（町田そのこ『ぎょらん』の書評）が優秀作品に選ばれました。

二〇二〇年度も、八月と三月に作品募集を予定しております。

八〇〇〜二〇〇〇字程度の書評を作成いただき、「どの書評で紹介された本を読みたくなかったか」を基準に、センター構成員による投票で優秀作品が決定します。作品応募・投票ともに構成員登録をされた方はどなたでもご参加いただけます。ペンネームによる応募も可能です。

開催スケジュールが決定しましたら、センターブログなどでお知らせいたします。奮ってご参加ください。



センター構成員一覧

(二〇二〇年七月現在・敬称略)

委嘱研究員

木村八重子 竹田修

研究員

伊藤かおり 伊藤敬佑

尾崎るみ 金子真奈美

岸野あき恵 倉田恵理子 小林夏美

佐々木江利子 佐々木裕里子

沢崎友美 志村裕子 鈴木あゆみ

鈴木宏枝 鈴木律子 高原佳江

中川理恵子 永島憲江 浜名那奈

半田涼太 枡村裕子 宮崎麻子

山本麻里耶 和田啓子

準研究員

安達愛 黒川夏帆

院生(博士課程(後期))

グラントウ、カトウリーナ

孔阳新照 五井結基 西村明恵

沼本知自 深民麻衣佳

三池洋江 三井彩愛 山越夢子

劉冠玫 若谷苑子

院生(博士課程(前期))

秋元みどり 阿部泉 今井奏恵

大橋珠美 小川千晶 敖博涵

高鷲榛奈 多田杏樹 立川真帆

奈良田和華 松尾紗代子

ライ、ケイギョク

編集後記

先に記しました通り、二〇二〇年度は児童文学専攻博士課程(前期)／修士課程三十周年、博士課程(後期)／博士課程二十五周年の節目の年です。そのため今号では在籍中の院生による署名記事を掲載いたしました。

新型コロナウイルス感染症流行の影響によるキャンパス閉鎖という状況下ではありますが、どの院生も皆、それぞれに置かれた環境の中で学習や研究活動を継続しております。

児童文化研究センターは、児童文学・児童文化研究者の皆様の研究・発表・交流の場として、事業の維持と益々の充実を図ってまいります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

(八代・酒井・宇佐美・遠藤)

児童文化研究センター
夏期閉室予定日

～8月5日(水)	9:00～17:00
8月6日(木)～9月20日(日)	閉室
9月21日(月)～	9:00～17:00

新型コロナウイルス感染症の流行により、7月28日現在、入構制限がかかっております。詳細は、児童文化研究センターホームページを随時ご確認ください。



『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集24』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。刊行された研究論文集は、児童文学・文化関連の研究者及び研究機関等に寄贈しています。

以下の要領で、『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集24』（二〇二一年三月発行予定）の原稿を募集いたします。ご投稿をお待ちしております。

締切

二〇二〇年九月三十日（水）正午必着

提出物

- ① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）
- ② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）
- ③ 論文要旨（300字以内、論文題目を併記）
- ④ 欧文要旨（採用決定後、100 words以内で提出。欧文題目を併記）

以上、①③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

提出先

〒一八二一八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五
白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

<endo@shirayuri.ac.jp>

研究論文集担当 遠藤知恵子

審査規定（センター規定より抜粋）

- * 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。
- * 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。
- * 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

投稿規定

- 一、執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。
- 二、児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。

【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。

【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

三、投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。

四、表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

五、本文のフォントサイズは10ポイント、用紙サイズはA4判、文字数と行数は40字×30行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は20枚以内とする。

六、参考文献及び注は本文末に一括する。

七、ページ番号を本文の中央下に付す。

※ 書式の細部については *MLA Handbook* 最新版及び過去の研究論文集を参照のこと。

八、本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。当該著作物は、「クリエイティブ・コモンズ表示―非営利―改変禁止4.0国際（CC BY-NC-ND

4.0）ライセンス」及びその後継版のもと、白百合女子大学学術機関リポジトリで公開する。なお、執筆者がその他のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの選択を希望する場合は、原稿採用後に、その旨を「学術リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。執筆者が当該許諾に同意しない場合は、その旨を「学術リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。その意思表示のない場合は、同意したものと見なす。

審査結果発表

二〇二〇年十月中旬

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、 unnecessary スペース等をなるべく使用しない。
- d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。
- e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術が必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会でも審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。